

2年目の新春を迎えて

日本熱測定学会会長
京都大学工学部教授

近藤 良夫



明けましておめでとうございます。会員の皆さんにはお元気で1987年の新春を迎えられたことと存じます。会長として皆さんのご健康とご発展を心からお祈り申し上げます。

さて、昨年、今年の新年の辞で申し上げましたように、昨年、われわれの学会は10月22日から24日にかけて、第22回熱測定討論会を、第7回熱物性シンポジウムとのジョイント・ミーティングとして、工業技術院筑波研究センター共用講堂において参加者240名を得て、まことに盛大に開催いたしました。またその後2週間を経た11月4日ないし7日には中国浙江省杭州市において中国化学会（溶液化学、化学熱力学、熱化学及び熱分析コミッション）との共催で日中合同熱測定シンポジウムを開催し、日本からは同伴者を含めて31名が参加して相互の友好を深めることができました。またその他に、一昨年どおり東京および大阪においてそれぞれ1回ずつ熱測定講習会および熱測定ワークショップを開催し、熱測定とその関連技術の普及ならびに問題点の解明に貢献することができましたこともよろこびの一つであります。

最近では貿易不均衡や円高などが引き金になって、わが国の産業の将来像がいたる処で摸索されており、またこれに伴って、これらに必要な各種の技術が、さらにそれらに理論的根拠を与える基礎が、追求され、解明されつつあります。「重厚長大」から「軽薄短小」への転換が急務とされる所以もここにあります。この問題についてわれわれが忘れてはならないことの一つはマーケットのサイズであり、したがって、新製品、新技術の開発が重要なことは言うまでもありませんが、これらに加えて新市場、新用途の開発の重要性は、いくら強調しても、しすぎることはありません。

このことはさておき、上記のような理由から、われわれが対象とする研究のテーマも、場合によっては大巾に変化するようなことがおこりつつあります。いささか説教めいて恐縮ですが、この際に次の二つは重要です。その一つは、この研究テーマの変更は自分が自主的に行ったと思込むことであり、もう一つは、自分がこれまでの研究によって得た知識は本物であり、本物はどこでも使えるはずであり、使えなければならないと考えることだと思います。ご検討いただければ幸いです。

もう一つ最近よく話題になるものに「国際化」があります。本会会員の多くの方々にとっては、今更なんだと思われるかも知れませんが、多くの大学で最近留学生の数が急増しつつあり、近い将来さらに増加が見込まれています。このような国際化は、本来、結果としてあらわれる現象であって、われわれの教育や研究が本物であり、広く共感を得るものであれば、それらは結果としての国際化につながるに違いありません。本来、学問とはそういう性格をもつものなのです。

最近、アメリカの著名大学のいくつかが、京都大学の近くにオーバースーズ・キャンパスを設け、日本研究や技術革新を中心とするカリキュラムで学生教育を行う計画が発表され、話題を呼んでいます。このアメリカの大学の学生諸君が京都の風土に溶け込んで、勉学に励まれることを希望しますが、同時に日本の大学は、それぞれ学生諸君に外国の大学での勉学に対する有効なインセンティブを与えるような独自の計画をたて、国際的な交流に貢献すべきであろうと考えます。

本学会はその発足以来、年とともに発展して参りました。これらの成果は会員の皆さんのご努力に負うものであることはいまでもありません。また一方、これらの活動を支え、学会の事務に長年にわたり誠実に取組んでこられた事務局のご尽力を忘れることはできません。年頭に当り、心からの謝意を表わすとともに、会員の皆さんのご健康とご成功を重ねてお祈り申し上げます。